

國學院大學 学術情報リポジトリ

Prise Article

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/297

選評

高倉明樹子（文学研究科博士課程前期一年）

朝顔の花手折る薫——『源氏物語』「宿木」巻

「今朝のまの」の独詠歌を視点として——

高倉明樹子論文は、『源氏物語』「宿木」巻において、薫が中の君を二条院に訪ねる際に、持って行く朝顔の花を自ら手折りつつ詠んだ「今朝のまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見る」という独詠歌について、従来を分析した上で、それまでの説とは異なる、より薫の心中に即した新たな読みを示したところに特長がある。

論点である独詠歌の意は、「今朝のつかの間の（朝顔の美しい）色をめようか。おく露が消えない（わずかな間にその命がかかっている花と知りながら）」となるが、この歌についての古注釈以来の解釈は、「花におく露は短命の象徴とされるが、その露よりも更にはかないのが朝顔の開花の時間である」という方向である。そして、その朝顔の花のはかなさに「亡き大君の追慕」と、当該歌に続けてつづやいた「はかな」と併せて「世

の無常」を思う薫の心中描写と受け取られてきた。さらには、独詠後に「女郎花をば見過ぎてぞ出でたまひぬる」とあるのは、「女を象徴する女郎花を「見過ぎて」とあるのは、薫が好色に関心がないことを示す」というのが従来理解である。

それに対して、高倉論文は、①「枯れゆくやうにて」命を落とした大君を、いま開花したばかりの朝顔に追慕しているとは言い切れないこと、②「この後に中の君を訪れた薫は、中の君との贈答歌において、彼女を朝顔に喩えて恋情を訴えていること」、③「朝顔には「無常」と「好色」の両義性が研究史の上で指摘されていること」などから、薫には「朝顔＝中の君」という一貫した意識があったことを詳細に論証する。その論証結果に立てば、独詠歌にかかわり「朝顔」に「無常」の意味のみを当てはめ、「薫の人物像」や「大君への追慕」のみが強調されるのは十分な読みとは言えないことになる。

以上のことから、薫は、朝顔の花を手折りながら、その朝顔に喩えられた中の君を「我がものとす」という思いを込めて「今朝のまの……」の独詠歌を詠んだのである。「女郎花をば見過ぎてぞ出でたまひぬる」は、朝顔（中の君）の他には関心がないからであって、独詠歌は「中の君への恋情を詠んだ歌」であること、しかも、その薫の思いは、その場で完結することな

く、中の君を訪れて贈答した「よそへてぞ……」の薫の贈歌にいたるまで連続性を帯びていることをも論じている。
 以上のように、高倉論文は、従来の説明では充分には理解しきれない論点について、新たな解釈を意欲的かつ実証的に論じたものであり評価できる。

平成二十九年 國學院雜誌学生懸賞論文募集

一、応募資格…第一部門(本学文学部・神道文化学部生・別科在籍者)

第二部門(大学院文学研究科・専攻科在籍者)

一、枚数…四〇〇字詰四〇枚〜五〇枚以内

一、テーマ…題目は問わない。

但し、未発表学術論文に限る

(卒業論文も可。ただし規定の枚数を収めること。)

一、締切日…平成三十年三月末日(当日消印有効)

一、入選…賞状ならびに副賞(五万円)

佳作…賞状ならびに副賞(三万円)

一、発表…入選論文およびすぐれた佳作論文は本誌に

掲載予定

一、選考…國學院雜誌編集委員会

一、投稿先…國學院大學総合企画部広報課

詳しくは本誌表紙裏面を参照